

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

## 『プレゼンス・アフリケーヌ』研究（2）テキスト・思想・運動

2020年度第3回研究会（通算第7回目）

日時：2021年3月13日（土）～2021年3月14日（日）10:30-18:00

場所：マルチメディア会議室（304）

使用言語：日本語

共催：共同利用・共同研究課題「プレゼンス・アフリケーヌ研究（2）テキスト・思想・運動」、科研費基盤(B)「世界文化〈資本〉空間の史的編成をめぐる総合的研究：アフリカ・カリブの文学を中心に」研究代表者：星埜守之（AA研共同研究員，東京大学）課題番号：17H02328）

3月13日

10:30-12:30 全員 研究成果刊行に向けたミーティング

13:30-18:30 全員 「『プレゼンス・アフリケーヌ』の論文を読む」

3月14日

10:30-12:30 佐藤幸男（AA研共同研究員，富山大学名誉教授）

「太平洋のカビール人とフランス植民地主義の現在：対位法としてのニューカレドニア独立」

13:30-15:30 細田和江（AA研特任助教）

「アハロン・アミールと「カナン主義」：イスラエルにおけるイスラエルにおける文芸誌『ケシュット』（1958-1976）への評価

15:30-16:30 佐久間寛（AA研共同研究員，明治大学），中村隆之（AA研共同研究員，早稲田大学）「研究プロジェクトの総括」

16:30-18:30 全員 総合討論

## 概要

本研究会の最終回となる 2020 年度第 3 回研究会を上記の日時およびスケジュールのもとに開催した。2020 年度第 2 回研究会と同様、対面とオンラインの併用型の研究会として実施した。司会は両日とも中村が務めた。

本研究会はその第一期研究会と合わせて計 6 年間をつうじてプレゼンス・アフリケヌをめぐる研究とその成果を継続的に刊行してきた。3 月 13 日は、その 6 年間の研究プロジェクトの集大成として、プレゼンス・アフリケヌの基本論文の翻訳と解説からなる論集の刊行に向けた計画の検討に充てられた。午前の部では、編集者の同席のもと、現在の出版に向けた進捗状況を確認し、午後の部では第 2 回研究会で決めた分担のもとに持ち寄った翻訳論文の検討をおこない、固有名詞の統一や、基本訳語をめぐる（people や nation、「～人」とするか「～族」とするか）議論をおこなった。また、その過程で具体的な進め方（執筆要項、提出期限）を定めた。

対して 3 月 14 日は共催の科研費基盤(B)「世界文化〈資本〉空間の史的編成をめぐる総合的研究：アフリカ・カリブの文学を中心に」と連動した 2 件の報告が実施された。

第一報告は、佐藤幸男 AA 研共同研究員による「太平洋のカビール人とフランス植民地主義の現在：対位法としてのニューカレドニア独立」（旧タイトル「フランス植民地主義の現在：太平洋のアラブ人の問い」）であった。2000 年の「日仏防衛協力」によるニューカレドニアの地政学的重要性の高まりを受けて、国家主義的戦略のなかに回収されないニューカレドニア住民の運動、とくに先住民カナクの動向を注視してきた佐藤研究員は、今回の機会に 2018 年と 20 年に実施された独立住民投票に注目し、独立支持派が微増した要因のうちに、フランスの流刑地とニッケル鉱山採掘から出発したニューカレドニアの少数派であるカビール人の子孫の存在感を読み取れるのではないかと論じた。また流刑地時代に、エルゼ・ルクリュールやルイズ・ミシェルといったアナキストが収容されたことにも着目し、ニューカレドニアが現代のグローバル・アナキズムの先駆的な土地であることや、フランスにおける植民地問題における中心的課題であるアルジェリア戦争の記憶がニューカレドニアにおいてもまた別のかたちで継承され

ていることを強調した。討議においてはアナキズムと Kommunismus をめぐる問題、具体的にはカナクの独立派のうちにアナキズム思想が見出せるのか否かなど、刺激的な討議が交わされた。

同日の第二報告は、細田和江 AA 研特任助教が「アハロン・アミールと「カナン主義」：イスラエルにおけるイスラエルにおける文芸誌『ケシェット』(1958-1976) への評価」(旧タイトル「アハロン・アミールと「カナン主義」：イスラエルにおける文芸誌「ケシェット」の功績」(仮))と題しておこなった。同報告は、イスラエル国家建設期において反主流派の思想として存在した「カナン主義」と呼ばれる文化運動(ユダヤ以前のカナンの地にアイデンティティを求めることから必然的にユダヤ教やユダヤ文化の否定を含み込む運動)に着目し、その「カナン主義」の思想的動向のなかから生じた雑誌『ケシェット』とその役割を、同誌の中心的人物アハロン・アミールの思想を通じて明らかとするものだった。討議では国家建設と脱植民地という観点からの他地域(キューバ)との比較可能性や、主流派雑誌『モズナイム』との相違など、多様な観点から活発な討論がおこなわれた。

両報告は、コロナ禍において2020年度に十分な調査をおこなえなかったという制限のもとで実施されたが、その分、全体の輪郭が明瞭に浮かび上がるという点でこれまでの報告との連続性も見出され、総じて最終回にふさわしい内実を備えていた。

最後に本研究の締めくくりとして佐久間寛 AA 研共同研究員および中村が6年間にわたる本研究プロジェクトを総括した。それとともに参加者全員がこの研究会を振り返る発言をそれぞれおこなった。

今回の研究会には、1日目に19人、2日目に15人、延べ34人が参加した。

(文責：中村)